

| 第5回 | 広川町協働推進計画策定委員会議事録 | | |
|--|---|-------------|--------|
| 開催日時 | 平成27年 2月19日(木) | 14:30~18:30 | |
| 開催場所 | いこっと(2F)大研修室 | 会議次第 | 別紙のとおり |
| 出席者 | <p>【協働推進計画策定委員会委員】</p> <p>・伊佐淳 委員長 ・大竹正二 副委員長 ・本多ミツ子 委員 ・塩澄文子 委員 ・綾戸信之 委員 ・原和敏 委員 ・榊ゆかり 委員 ・中村彰子 委員</p> <p>【町代表】 広川町長 渡邊元喜(報告書提出時参加)</p> <p>【事務局】</p> <p>・政策調整課長 丸山信夫 ・政策調整係長 樋口信吾 ・政策調整係 氷室健太郎 ・総務課まちづくり係 井上新五</p> <p>【アドバイザー】</p> <p>・十時裕 ・辻桂子 ・今村晃章 ・貞清潔</p> | | |
| 配布資料 | <p>【資料-1】 広川町協働推進計画(第4稿原案)</p> <p>【資料-2】 広川町協働推進計画(報告書案)修正箇所一覧</p> <p>【資料-3】 広川町協働推進計画原案 パブリックコメント回答予定一覧</p> <p>【資料-4】 パブリックカフェ実施報告</p> | | |
| <p>1. 開会のあいさつ</p> <p>事務局(丸山): 皆さん、こんにちは。定刻となりましたので只今より、第5回広川町協働推進計画策定委員会を開催します。はじめに委員長あいさつをお願いします。</p> <p>2. 委員長あいさつ</p> <p>伊佐委員長: 皆さん、こんにちは。いよいよ最後の委員会となりまして、パブリックコメントも出たということで、本日は計画書案の最終調整となっております。その後、最終答申を、町長に提出することとなります。今回が最後の委員会となりますので、誤字・脱字等の細かい部分でも気付いた点があれば、どんどん出して頂いて、今まで同様に活発な意見を出して頂き、実りある報告書にしたいと思っております。本日も、ご協力お願いしたいと思っております。</p> <p>事務局(丸山): ありがとうございます。それでは、議事に入ります。議事進行については伊佐委員長の方でお願い致します。</p> <p>伊佐委員長: まずは、お手元にある資料のご確認をお願いします。《資料確認》</p> <p>3. 議題</p> <p>(1) 広川町協働推進計画案について(最終調整)</p> <p>伊佐委員長: それでは、計画案について事務局より説明をお願いします。</p> <p>事務局(樋口): 前回の委員会を受けて、皆さんに報告書の修正を行って頂いて報告書原案という形で、1月19日(月)から2月6日(金)までの間、パブリックコメントを実施しました。また、2月1日(日)に、まちづくりカフェに参加された方に対して、報告会を兼ねて意見を頂くパブリック</p> | | | |

カフェを開催しています。パブリックカフェでの意見の内容は資料－４の実施報告のとおりです。カフェには、年度末の日曜日で行事が多い中で17名の方が参加されました。ここの資料については、事前に配布しており、ご確認のことと思いますので省略させていただきます。パブリックコメント及びパブリックカフェを受けてですが、資料－３をご覧ください。この資料は、パブリックコメント及びパブリックカフェで出された意見等を集約して項目ごとに分類し、一覧で取りまとめています。期間中の意見応募は3名の方から意見を頂きました。また、カフェ参加者が17名あって、ここで出された意見も、本計画に関係ある部分はパブリックコメントとして取り扱いを行いました。パブリックコメント及びカフェの両者の意見内容の総数は64件となっています。

これから、パブリックコメントの意見内容及びそれに対する町の考え方と計画書への反映・対応についてご説明します。

《パブリックコメントを受けて委員会で検討すべき事項の整理》

【計画全般の用語に対する意見】

- ①(No.6)：計画書中の表現に「自律」という表現が使用されているが、「自立」という表現もある中であえて「自律」の文字を使用している点について、その意図を示したらどうか。
- ②(No.7～No.11)：「市民公益活動団体」「地域コミュニティ」「住民自治」の行政的用語や「パブリックコメント」「ワンストップ」「グローバル化」などのカタカナ用語がわからない。下段に注釈を付けたらどうか。

【表紙のタイトル・デザインについての意見】

- ③(No.13～No.15)：タイトル名「広川町協働推進計画」が固くてわかり難い。
- ④(No.16～No.17)：挿絵が親子の2世代なので3世代以上の挿絵にしたらどうか。また、シンボルマークを考えてはどうか。

【計画の目的についての文中の表現に対する意見】

- ⑤(No.18)：「・・・行政だけでは対応できないため・・・」を「・・・行政だけでは限界があり・・・」とすべきではないか。

【委員名簿の誤記に対する意見】

- ⑥(No.19)：委員名簿で大竹氏の肩書は法人格を持ったNPOなので、「NPO法人」とすべき。

【ボランティアセンターの施策に対する意見】

- ⑦(No.47～No.49)：地域課題の相談を含めたワンストップ窓口は、ボランティアセンターでは無理。地域課題の対応は行政の仕事ではないか。

※()書きのNo.は資料－３の表中の番号

【事務局の考え方】

- ①：この点は委員会で議論された部分であり、委員会で対応を考えて頂きたい。
- ②：わかり難い用語については、個人によって差がある。では、どこまで変換するのかについては、新聞等で一般的に広く使用されている部分については他の用語に変換する必要はないと考えている。しかしながら、用語の変換が必要と思われる部分もあるかもしれないので検討をお願いする。また、意見には注釈を入れてはという意見もあったので、そうした対応も考えられると思っている。
- ③：委員会での検討をお願いする。

- ④：委員会での検討をお願いします。
- ⑤：意見者の指摘どおり修正したい。（表現の訂正）
- ⑥：意見者の指摘どおり修正したい。（誤記の訂正）
- ⑦：委員会での検討をお願いします。

【その他（資料－２参照）】

計画書の４ページの「計画策定の進め方」の図中、第５回の委員会の日程が空白となっていたので、本日の日付１９日（木）を挿入する。

伊佐委員長：沢山の意見が出されていますが、資料－２については、これでよろしいでしょうか？

委員：はい。

伊佐委員長：では、このとおりの修正をお願いします。本日の協議のメインは資料－３のパブリックコメントの意見に対する検討事項となります。では、検討事項を一つずつ検討していきたいと思えます。はじめに、「自律」の表記については意図的に書いたのだらうということで、私達委員会でも、そのように使いました。その理由を入れたらどうかということですが、如何でしょうか？
例えば、２ページの「協働の木の話」のところに「お互いが自律すれば共に支え合うことが出来ます。」とここで最初に「自律」という言葉が出てきます。これをこのページに注釈で記載するのか、それとも用語説明の場所に記載するのかということがある。この意見は男性の意見か、それとも女性の意見か？

事務局（樋口）：女性の意見です。

伊佐委員長：では、女性的感覚で榊さん、如何でしょうか？

榊委員：前の委員会では、もめた部分ですよね。議論したときの文章はどこでしたかね？

伊佐委員長：文章の順番は変わったりしている。

榊委員：１２ページに「自律とは」とある。

伊佐委員長：そうですね。１０ページには、課題５で「町民や行政が自律して行動する協働推進のための仕組みが必要です。」とある。この文章中に「対等な関係を築くために自律」とあるが、「自立」とした場合、小さな町の自治体で財政が小さな町と対等にやれるのかとなる。ボランティアで一生懸命やっているところに「立て」と言われても、立てるかという議論をしたと思う。「自律」とすれば、財政的に厳しい部分はあっても、やるべきことをきちんとやるということが「自律」だと思う。財政的に厳しくて思うように出来ないことがあっても、ちゃんともも言えるし、ちゃんと行動できるという団体は多数ある。そうした部分を「律する」方の「自律」で使っている。このような話をさせて頂いたと思う。町の考え方としては、資料－３のNo.5で記載されているように、「自立」は経済的に独り立ちする意味合いが強く「自律」は自らの意思で行動する意味があるとなっているが、こうした部分を報告書の中に織り込むかどうかである。

中村委員：私達があれだけ協議していた部分が、町民の中からも出たんだなあと思った。もし、そこを説明するとしたら、何処に入れるのだろうかと思う。

伊佐委員長：そうですね。最初に「自律」という用語が出てくるのは２ページである。それとも・・・

綾戸委員：注釈の入れ方は同じパターンでやった方がいい。その場で、文章で繋げて訳したら、わからない人もいる。

伊佐委員長：そのページの下に、脚注を設けましょうか？

綾戸委員：その方が、わかりやすい。

中村委員：せっかく、きちんと文章化している間に入れたら途切れる。

塩澄委員：説明する用語に「注1」とか「注2」として、下に解釈を入れたらいい。

伊佐委員長：では、「自律」の用語で「律する」という字を用いていることは説明したがいいということ
でいいか。どのように入れるのかは脚注でページの下に入れ込むということでもいいか。こうした対
応は可能か？

事務局（樋口）：可能である。注釈の位置の問題だが、「市民公益活動団体」や「地域コミュニティ」と
いう用語は、それぞれ15ページと14ページに解釈している。その場では、ちゃんと説明した形
になっているが、その文字は、説明箇所の前の段階から出てきているということであった。なので、
注釈を入れる位置など入れ方を考えておく必要がある。

伊佐委員長：私達が脚注を行う場合のログの取り方は、例えば、用語説明が5ページにあって、既に2
ページで説明した場合、「詳しくは5ページをみてください。」となる。そうだと煩わしい。

綾戸委員：一番最初に出た場所に脚注を入れるのが良い。

伊佐委員長：その後に同じ用語が出た場合の脚注は必要ないか？

綾戸委員：そこまでは必要ないと思う。

本多委員：私も、最初に入れ込んでおけば、それでいいと思う。

伊佐委員長：用語の定義集みたいな部分は、何処でしたかね？

事務局（樋口）：協働の主体と協働の原則5原則については、それぞれを説明している。「自律」の定義
については12ページに「自律とは」という書き出して書いている。同じように「相互理解」「目的
の共有」「対等」「情報公開と情報提供」という用語の解説はある。また、協働の主体となる部分は
14ページから15ページに「地域コミュニティ」「市民公益活動団体」に説明がある。

伊佐委員長：そうですね。12ページの「自律」という部分は定義付けされている。それを自分の足で
立つ「自立」との違いの説明がないので、そうした部分は先頭ページで説明しておけばいい。それ
では、こうした説明が必要な用語は、最初に出てくる位置に脚注を設けるということでよろしいか。

委員：はい。

伊佐委員長：「市民公益活動団体」の用語も早い段階で出てくるが、そこは解説部分をコピーアンドペー
ストで、脚注に入れればいい。7ページにありますかね。

事務局（樋口）：3ページには出てきている。「計画の目的」の下段に「さらに市民公益活動団体など
も連携して…」という部分と下の図にも入っている。

伊佐委員長：解説と同じような説明を、少し短くしてもいいので3ページにも入れてもいいですね。

事務局（樋口）：解説が必要な用語を示して頂けたら、先頭ページは文字検索で事務局にて探し、そこに
入れ込むということよろしいでしょうか。

伊佐委員長：それでよろしいでしょうか。

委員：はい。

伊佐委員長：次の検討事項に進みます。資料-3のNo.9の意見についてですが、「言葉が難しい。」と
いう件についてだが、この部分は計画が行政計画なので行政用語を使わないという訳にはいかない
と思うが、これには2つの考え方がある。久留米市での協議の際もそうであったが、「これくらいは
勉強してもらわないと。」という話もある。住民参加や住民自治を考えているのであれば、自らが勉

強するという必要であると考えた方もあった。逆に、「そんなことを言っても…」と言う人もいる。その時に出てきた案は、中学生が読める程度で、別冊で用語集を作ったらどうかという話が出てきた。中学生が読める程度は、新聞を読める程度だそうだ。中学を卒業したのであれば、ある程度の漢字や用語も理解出来るはずである。その程度に噛み砕いて、別冊で用語集作成のアイデアがだされたが、その後どうなったのかはわからない。市は予算の関係で、どうなるのかわからないが、努力すると言われていた。

榊委員：子どもでも読めるように漫画で作るとか。

伊佐委員長：漫画というより、一コマ挿絵みたいな形で示したがいいと思うが、言葉はもっと噛み砕いて記載したらいい。「自律」と「自立」が説明出来るような何かがあればいい。別途作成するという事も考えられる。しかし、これは予算が必要になる。誰が、どのようにして、いつまでに作るのかということになる。

綾戸委員：別冊まで作る必要はないと思う。注釈できちんと整理されたらよいのではないか。何処まで訳すかという部分に戻るが、重要な部分だけをやったらいいと思う。特に私たちが理解してもらいたいと思う部分は、勘違いされたら困るので、きちんと記載する必要があると思う。

伊佐委員長：説明は、ゴシック体みたいに少し濃くするとか、カラーで出すのであれば、赤文字にするなど目立つ形にすれば、説明に注意がいくと思う。

綾戸委員：注釈は、大体、フォントが一つ下になると思う。フォント数を変えてゴシックで作成するのもいい。

伊佐委員長：斜体等で文字形式を変えてもいい。そうすれば目立つと思う。

榊委員：わからない文字にふりがなを振るということもある。

伊佐委員長：他に、より見やすくするための意見はありませんか。それこそ、協働でこの計画書をわかりやすく読む会など、町民の中で勉強会などあったらいいなと思う。町民から提案をもらうのもいいのかもしれない。要約して出すのは簡単だが、町民自らが勉強してもらって、物にしてもらった方がいい。作ってみたいと思われる方はいますかね。住民のアイデアで色んな形に出来る。印刷には費用が掛かるが、そんなに高くはないと思う。雑誌の編集みたいに……。では、皆さんのご意見としては、別冊で作る必要まではないということですね。

榊委員：協働の何かを取り組む中で、その中で勉強会が出来たらいいと思う。例えば、八女弁講座など、それを、協働推進計画を題材にやるなど。

伊佐委員長：そうですね。そうしたら注目を集めることが出来る。関心を持ってもらうことも、勉強である。そうした事業は、課として実施できますよね。

事務局（樋口）：これを作った後、各課での対応をすることになるが、協働を広げるために勉強会をするといった部分は考えられると思う。

伊佐委員長：久留米市では、久留米弁で書けないかという案もあった。広川町でも出来ないか？自由な発想で、解説書作りなどに繋がったらいい。

事務局（樋口）：今後もまちづくりカフェの取り組みは進めていきたいと考えている。

伊佐委員長：そこを勉強会に出来たらいいですね。

事務局（樋口）：カフェの取り組みを勉強会等に繋げられたらいいと思う。また、委員長から出された協働のまちづくり解説の本づくりなどについては、昨年、ここに図書館も出来ているので、図書館活

用のワークショップ等も実施していきたいと考えている。

伊佐委員長：手作り本づくりワークショップがあってもいいと思う。どうですか？

事務局（樋口）：そのワークショップの具体的な内容までは考えていないのでわからないが、本づくりのワークショップを行うことも可能だと思う。パブリックコメントの意見にも、図書館の活用の意見があったので、そうした分野での取り組みも出来たらと考えている。

伊佐委員長：そうですね。出来るだけ、難しい言葉は注釈を加えて、斜体文字等で少し目立つ様にして、噛み砕いた説明を入れるようにしてください。それ以上の部分は、町民の方自らも勉強して頂くことと、広報での周知も行うことでお願いします。また、カフェを利用した勉強会等をやるなど、こちらから出す部分と自らの勉強による両方の歩み寄りによって理解を深められるようになればいい。そういうことで、もう少し、出来る部分は直しましょう。具体的な部分は町民の方からの意見でありましたよね。

事務局（樋口）：出てきたのは、「住民自治」「パブリックコメント」「ワークショップ」「ワンストップ」及び「グローバル化」等がわからないと言われた。

伊佐委員長：「グローバル化」を訳せば「地球規模化」となるが、それをカッコ書きで追記するかである。「ワンストップ」は何て訳しますかね。

綾戸委員：この中で使用しているワンストップは注釈する必要があると思う。窓口のワンストップもあるし、受付のワンストップもある。

大竹副委員長：普通は窓口のワンストップですよ。

綾戸委員：久留米では、窓口のワンストップをやっているが、そこに行けばすべての手続きが出来る。それは、ワンストップ窓口である。この計画で入れているワンストップ窓口は、どのようなものか注釈があった方がいいのかもしれない。

伊佐委員長：窓口の集約化という言い方はしませんかね。色々訳していくと、逆に難しくなる。

本多委員：高齢者にしたら、出来るだけカタカナ文字を減らして、わかりやすくしてもらいたい。

伊佐委員長：カタカナ文字を変換したが難しくなる場合もある。

本多委員：日頃、何気なく使っている用語も、知らないものは知らない。難しい用語が多く使われていれば、難しく、もう読まないとなるかもしれない。何もかも、すべてを訳すというのは要望が大きいのかもしれないが、出来るだけ意識のない人に呼びかけるのだから、そのためにはある程度は噛み砕いて表現することも必要だと思う。

大竹副委員長：私たちは、概ね「ワンストップ」等はわかる。しかし、一般の方は、カタカナ用語に抵抗がある。

伊佐委員長：ワンストップは何と訳せばいいでしょうかね。すべての用事を済ませること？

塩澄委員：それでいいのではないですか？

伊佐委員長：もっと言えば「いちいち、よそにまわらなくていい。」

綾戸委員：総合窓口ですね。

伊佐委員長：総合窓口が馴染みあるかもしれないですね。

綾戸委員：23ページにはワンストップ窓口を「地域課題に関する相談をはじめ、コーディネート」の窓口を一本化する」と書いている。

伊佐委員長：「コーディネート」も何かとなる。それでは、No.9の検討事項については、町の考え方の

欄には「出来るだけ注釈を入れるなど対応を検討します。」としてあるので、このとおりで対応してもらうことで、次の検討事項に入ります。No.13 のサブタイトルを付けたらという意見や、協働推進計画をサブタイトルで別途わかりやすいタイトルに出来ないかという意見についてです。

塩澄委員：「協働推進計画」というタイトルについては、多くの方からよく言われた。この計画書案を頂いたときも、「何？」と感じた。むしろ、サブタイトルを「広川町協働推進計画」として、この協働推進計画って何かと思った時に、「みんなで一緒にやろうよ。」という言葉で理解できた。いい言葉があったら、「一緒にやろばい！」とか「やろばい計画」とかで表し、その下に「広川町協働推進計画」を入れたらいいと思う。先ほど大竹さんも言われたが、これをそのまま見てくださいと言って誰か見るだろうか？ 私たちは、表紙を目で見て、面白そうという感じがあって中を開く。だから、人に目に付くように、持ってこないと、なかなか開く気にならない。まずは、これを開かせることが、大切であると思う。私は、「これはなんだ。」と言われるような文言でもいいと思っている。かえって人の目を引く様にしたい。

綾戸委員：方言等を入れてですかね。

塩澄委員：そうですね。キャッチコピーみたいなもので表現できないか。

綾戸委員：私は、計画書の名称はこのままにしておくべきであると思う。入れるならサブタイトルで入れた方がいい。

原委員：確かに見た目も角々しているので、固いイメージはある。あくまでこれは、協働の推進計画ですから、町長にお渡しして、町で推進してもらうものである。これはこれでいいと思う。本タイトルとしては、この形で問題ない。もし、サブタイトルで町民の方に提示する場合は、何か下に、入れたらいい。計画書3ページに第4次総合計画に「参画と協働のまちをつくる」という項目もあるので、この辺を文字ってわかりやすいサブタイトルを付けておいた方がいいと思う。現時点では、この形で進めておいても、全然問題ないと思う。町民に新たに示す場合は、何か目を引くもので示したがよい。

大竹副委員長：この計画は、どの辺まで配布されるのか？町民にもわかるように作るのだから、

綾戸委員：配布までは考えていないのではないかな。

事務局（樋口）：まずは、行政内部の意識を上げるための計画として配布は予定していない。最終的には、具体的な考え方が示されれば、町民に示す形になる。

綾戸委員：ここでの計画は委員会が提言する骨子であって、実施計画等が出来れば示すということですよ。

事務局（樋口）：そうだ。当然、提示された内容はホームページでは公開する。戸別配布までは考えていない。

塩澄委員：では、広報には掲載されるのか？

事務局（樋口）：広報には掲載する。今回、委員会から提言頂くことを受けて、広報でお知らせする。ただし、来月号では間に合わない。4月号での広報周知を予定している。

綾戸委員：詳細に示すことは出来ないと思うので、掻い摘んだ内容で周知するということでしょう。

事務局（樋口）：そうです。

綾戸委員：私は、サブタイトルを付けるのなら、「みんなでやろうまちづくり」という程度でいいと思う。

塩澄委員：町民に配布されるものと思っていた。

事務局（樋口）：すみません。

伊佐委員長：サブタイトルは方言を入れてもいい。

綾戸委員：広川弁では、どんな言葉があるか。

中村委員：「いこっと」という言葉は方言の一つですか？

塩澄委員：「あそこに、いこーっと。」とか言う。

綾戸委員：これを提案したのは広川町の人ではない。静岡の人だと聞いている。これも方言だと思う。

サブタイトルは、何かまちづくりを連想できる方言でないといけない。

大竹副委員長：この辺でも「いこっと」とは言う。使う。

伊佐委員長：一人で出来ないことを一緒にやろうという方言で出せる言葉はないか？

中村委員：この委員会の会議に行くのに、職場の人に「協働推進の会議に行ってきます。」というのと、「はっ」と再確認される。なので「まち計の会議に行ってきます。」と省略している。

塩澄委員：私は「一緒にやろばい計画」としたらと思っている。それを更に短縮して「一やろ計画」としたらとも思う。

綾戸委員：「一やろ計画」でもいいのではないか。

伊佐委員長：計画名を呼ぶときはそれでいい。「一緒にやろばい計画」でもいい。

中村委員：ポンと言いやすい呼び方があったがいい。

塩澄委員：こんなネーミングは、子どもが上手である。

伊佐委員長：子どもから案をもらう時間はありますか？

事務局（樋口）：もう少し、早い段階だったらよかったが、計画書の提出期限も近づいているので難しい。

伊佐委員長：塩澄さんの「一緒にやろばい計画」はどうですか？

中島委員：わかりやすいとは思う。

塩澄委員：今、ここで必ず作る必要があるか？

事務局（樋口）：一応、本日の会議で方向性を出してまとめたいと考えていた。広報にも掲載予定であり、ある程度まとまった形が必要だ。

塩澄委員：それでは、急ぐ必要がありますね。

事務局（樋口）：この計画は国の事業でもあるので、報告書を提出する必要もあるため、時間がない。

榊委員：サブタイトルは、次の実施段階でよくないか。

原委員：実際の活動に入ってからでいいと思う。その段階で決めてもらえばいいのではないか。取りあえず、この計画で出して、推進していく段階で、最初に塩澄さんが言われるように考えたらいい。

綾戸委員：実際に公募してやってもいい。

伊佐委員長：協働が始まる時に「一緒にやろばい計画始動！」などの表現で取り掛かれたら面白い。

綾戸委員：では「一緒にやろばい計画」も将来に案として、出してもらえたらいい。

原委員：「だっでんで、すっばい。」とかいうような方言はある。実際の段階で公募してもいいと思う。

伊佐委員長：それでは、今回の計画書（委員会報告書）は、このままのタイトルでいきましょう。次は、表紙の絵の人物を多くの世代にしたらどうかという意見です。

綾戸委員：この部分はそうだと思う。

事務局（樋口）：ここは著作権等を考慮し、市販のデザインの挿絵から選んだので、その中であつたら差し替えたい。

綾戸委員：大竹さんに描いてもらうことも考えられる。

本多委員：3世代が入ればいい。

大竹副委員長：そこは考えておきましょう。

伊佐委員長：資料4ページのNo.47 ワンストップサービスは行政の仕事であるという点についてだが、どうでしょうか。

大竹副委員長：実は、この推進計画の案が出来た段階で、ボランティアセンターの運営主体である社会福祉協議会に計画を見せた。そしてボランティアセンターの運営に係る部分について、社協と運営委託を受けている私達NPOのすくらむ及び役場の樋口さん氷室さんを交えて協議させてもらった。その中で、実施の問題としては「ワンストップ窓口」の問題が一番の問題として出てきた。特に「地域課題に関する相談」を含まっている点について、ボランティアセンターの役割を超えているという話になった。地域課題に対する部分はやはり役場が行うべきものではないかと思う。地域課題を相談内容に入れたら、限りになく広い相談となる。それをボランティアセンターで受けるというのは、難しいと思う。それで、この部分については、その上の施策の1番に「市民公益活動への支援」とあるが、この中に含めてしまえばいいと話となった。「ワンストップ窓口の創設」は削除してもらいたい。それと、「(3)ボランティアセンターのスキルアップ」についてだが、この項目を消して、「ボランティアコーディネーション等各種講座の実施」は「(2)ボランティアセンターの充実」に入れてもらいたい。以下カッコ書きの番号を繰り上げる。

事務局（樋口）：社協とボランティアセンターの運営会議に呼ばれて私も説明に行った。ワンストップ窓口の問題は、カフェでも意見が出ていて、ボランティアの相談に関するワンストップ化という表現であれば問題ないが、そこを地域課題まで入った相談対応までは業務範囲が大きくなり過ぎるということで、そこは行政の仕事ではないかという話になった。実際には、ボランティアに関する相談は既にワンストップ的に実行しているということで、ここで対応できない部分は次に繋げているということだった。このため、ワンストップ窓口を新設するということにはならないということで、削除してもらいたいということであった。ここの施策の上の「(1)市民公益活動への支援」の丸ポツの2つ目に「NPO・ボランティア活動に係る相談窓口の充実」の考え方の中に入ってくるのではないかということだった。相談窓口の充実は当然やっていく必要があるとは感じているということで、ワンストップ窓口の新設ではなく既にやられていることであるため、この部分は削除させてもらって、相談窓口の充実に取り込ませてもらいたいと思っている。それから、「(3)ボランティアセンターのスキルアップ」の件についてだが、ボランティアセンターでは色んな方が参加されてがんばっている。そうした方々は、自分たちはしっかりやっているという意識の中で、「スキルアップ」を項目立てしてあえて入れ込むと、そうした人たちの中にはやっていないと思われているのかという様にも捉えられてしまう。これはセンターの充実の一つではないかということで、「スキルアップ」の項目だけを出す必要があるのかとなった。スキルアップ講座を開催するということに対しては、当然スキルアップをやる必要性は感じてあって、その各種講座等の実施の項目は残して、大竹副委員長が言われたとおり、「(3)ボランティアセンターのスキルアップ」の項目は外して、4番以降を順次繰り上げたらどうかということだった。

伊佐委員長：皆さんどうですか？

大竹副委員長：実際に、一生懸命がんばっている。毎月、センター運営者での会議も実施している。ま

た、ボランティアで参加する人達も来てもらって話をした。センター運営も3年目になって、自分たちなりに、様々な研修を行ってスキルアップをやっている。そこに、あえてこうした表現が出れば、何もやっていない様に捉えられてしまう様に感じる。

伊佐委員長：皆さん、今の説明でおわかりですね。3番の項目は消すが、「・ボランティアコーディネーション等各種講座の実施」は残して2番目の項目に含めるということですね。このようにやって、よろしいですね。

委員：はい。

伊佐委員長：検討事項は以上ですね。その他に「町の考え方・対応」については、この回答内容でよろしいか？特に気になることはありませんか？

塩澄委員：これは文章とは関係ないんですが、色んな部分に「ボランティア」という表現が使われている。ボランティアの言葉には、それぞれに認識が違っていて、多くの方は、金と時間に余裕のある人と捉われがちである。そのために、ボランティアという名の強制にならないか心配である。町がどのようにボランティアを捉えているのだろうかと思う。

伊佐委員長：そうしたら、ここの注釈も必要なのかもしれない。ボランティアという言葉の説明が必要ではないか。

塩澄委員：そこは大事かなと思う。

大竹副委員長：そこは、よく言われる。

伊佐委員長：それは困りますね。

本多委員：それがいやで、「出来るときに、出来る範囲でやる。」と言っている。

伊佐委員長：町のことで気になることがある。それを、出来る人が、出来る時に、出来る範囲でやるんだという形で注釈があった方がいい。ボランティアは3Dと呼ばれる。出来る時の話なので、ボランティアは30分でもいい。朝の10分の清掃でもいい。

塩澄委員：だから、無理をさせてはいけないと思う。

伊佐委員長：そんな説明を入れたらどうか。

事務局（樋口）：ボランティアの解釈を入れ込むということですね。

伊佐委員長：ですから、ボランティアは町から強要されるべきものではない。気付かれた方が、やってみる。そんなものである。

塩澄委員：今回の推進計画は、ボランティアの強制になりがちな恐れがあると思う。

事務局（樋口）：その意見は、カフェのときでも「ボランティアを強制しないで欲しい。」という意見もあっている。結構、計画内に出てきている文章がボランティアに関する部分が多く書かれていて、押付けのようにも取れる部分があるのかもしれない。カフェでもボランティア的事例を多く紹介したため、それをさせられるのではないかと捉えた方もあったと思う。

本多委員：そこは、「出来る人が、出来る時に、出来る範囲でやる。」のがボランティアだということを、きっちり示す必要がある。そうすれば、「出来る時でいいのか。」となる。

大竹副委員長：町の広報にはよく出している。機会がある毎に、そんなものだと言っているが、それでも安価な奉仕者であると捉われている。

塩澄委員：都会であれば、ちゃんと断られるが、田舎はそうはいかない。そこは半強制的な部分がある。そこを、出来ない人はいいいんですよという部分を知ってもらう必要がある。ボランティアの言葉を

多くの方に理解してもらう必要がある。だから、ダメな時は、ダメと言っていいんですよと、そこをわかってもらう必要がある。

伊佐委員長：そうですね。

塩澄委員：今、ボランティアとって強制させられる部分が結構ある。

伊佐委員長：そこは、しがらみがあったりする。「あの人が言うなら断れない。」とか、そうした部分はある。しかし、それは本来のボランティアではない。

本多委員：ボランティアの言葉は、大震災以降、根付いてきている。

伊佐委員長：アメリカに調査に行ったときに、ボランティア大国アメリカというイメージがあって、相当の数の方が経験しているし、学校時代もやっている。上の学校に行く場合、ボランティア経験を聞かれる。それが評点になっていたりする。アメリカでも平均すれば、ボランティアに関わる時間が1週間に30分だけという人も結構いる。日本では、長い時間をやっているが、アメリカはそんなものだ。それでも、ボランティアをしたことになる。

塩澄委員：外国は小さい時から、そんな習慣付けがあるので、大人になってもすーっとやれる。しかし、日本は、意外と学校であまり教えない。

伊佐委員長：向こうの学校では、子ども達に清掃もさせない。だけど、気付いた人が汚いと思ったら、掃除している。それをボランティアとしている。日本では、清掃とって一斉にやらされる。

大竹副委員長：この前、小学校に老人クラブで昔遊びを教える活動に参加した。10人程度の者が参加していたが、昔遊びをやった後で、子ども達とっしょに給食を取った。給食をいっぺんに持ってこられないから、一つずつ持ってきて渡していたが、気付いた別の子が、さーっと持ってきてくれた。私は「良いことしたね。これはボランティアだよ。」と言った。その子は、「これがボランティアですか。」と言った。

榊委員：子ども達は、褒めてやるといい。そんなことを私たちは地域の人から学んできた。

中村委員：子ども達は「ボランティア」より「お手伝い」という言葉がよく使われる。子どもには、ボランティアという言葉が根付いていない。「お手伝い」という言葉で根付いている様に思う。

伊佐委員長：そうですね。そこは、気付いた人がお手伝いすることです。お手伝いイコールお小遣いとなっていれば、少し違うが。それでは、計画書の注釈に「ボランティア」を加えておいてください。他に何か気になる点はありますか？気付いた点があれば、ここで直して最終案にしたい。

事務局（樋口）：事務局からもよろしいでしょうか。26ページの「安心・安全のための協働事業」の中に「安心安全のための情報発信」とあるが、これはカフェでの意見を、そのまま記載されて、こうなったと思うが、「安心・安全」または「安心安全」と記載されている部分について、総合計画では、「安全・安心」といった統一用語を用いている経緯がある。そこが総合計画と違った表現になるため、統一できたらと思う。安全があるから安心があるということで、「安全・安心（安全安心）」に変えさせて頂きたい。

伊佐委員長：如何ですか？

委員：それはいいと思う。

伊佐委員長：もう一つ、細かいことですが、「安全・安心」と「安全安心」があるが、どちらが正しいのか？町では、どちらを使っているのか？

事務局（樋口）：ポツは入れていなかったと思う。

伊佐委員長：では、そちらで統一しましょう。他にありませんか？

塩澄委員：内容全般についてよろしいか？

伊佐委員長：どうぞ。

塩澄委員：この計画を進めるためには、行政の職員の意識がなければ進まないと思う。この計画の中にも職員の研修指導について記載されている。こうしたことが、ちゃんと実施されることも重要だと思うが、やはり、横の繋がり、縦の繋がりが必要になる。これをやるためには、リーダー達の大きな旗振りに掛かっている。今年は、町制60周年になるそうで、これから様々な行事があると思うが、まずは3月の終わりに広川リレーマラソンがある。それが、あまり町民に浸透していない様に思える。もう少し、盛り上がってもいいと思う。協働推進の取り組みでも、何でもそうだが、やろうと思った時にはウェーブが必要だと思う。そうした波に乗ってやったら、やりやすいと思う。一人ひとりに説明するより、今年の一つひとつの行事を盛り上げていけば、本当にやりやすい形で、説明なしで理解してもらえないだろうか。広川町では秋に広川まつりがあるが、あれだけの客が集まってくる。あれだけの方がやろうと思ってまとまって行動されている。これだけの方が一緒になってやって、あれだけの人を集めているのだから、やれないはずはない。是非、今年は庁舎の上に赤いベストと帽子をかぶせて、広川町の60周年をお祝いしようという感じに持って行けたらいいと思う。そんな感じで、一つひとつの行事をやったら、やれるんじゃないか。

伊佐委員長：大学の学園祭や高校の文化祭のように、60周年記念に合わせてみんな考えて60周年の行事を何かやろうと、行政区の地域活動でもボランティア活動でもいいが、それぞれのお祝いの仕方を考えて、町と協働でやれたらいい。

塩澄委員：私も来年は還暦なので、是非、いっしょに盛り上がっていきたい。そしたら、町民の皆さんも役場の人たちに対して協力的になって、スムーズに地域でも動いてくれそうな気がする。

伊佐委員長：そのとおりである。そこは、24ページの仕組みづくりのところに、一部入れ込んでいると思う。ここでは、「行政内の理解と連携を進めるのために、(仮称)協働推進会議等(庁内会議)の設置が必要と考えます。」としており、ここで意識を変えてもらいたいと考えている。何処の市町村もそうだが、また、県もそうだと思うが、「今度、協働推進の担当になったので大変で、協働を勉強しないといけない。」とか言っている。本当はそうではなく、そこに行かなくても、みんなが気持ちを持っていなければならないことである。佐賀県庁の職員でもそうであったが、協働の仕事は、協働推進課の仕事であり、その人たちが勉強すればいいと思っている。そこは違う。市町村職員研修所で研修に来ている職員にも、まずは現場に出ることが先であると言った。市民の方と一緒に見て参加して、30分でいいのでボランティアすればいい。そんな、ちょっとしたことで顔を出してやれば、「役場職員も来るようになったね。」と一緒にやろうという気になる。そのように、普段から意識しておく必要がある。担当課だけがやるのではダメだ。一緒にやるのが協働だから、その時に、やってもらおうとするのなら、普段から関係を作っておく必要がある。普段からコミュニケーションを取っていれば、町の問題も理解してもらえる。そんな普段からの会話であったり、コミュニケーションを取ることが大切だ。

塩澄委員：仕事が普段から忙しいのはわかる。だから、周りの人を動かすことが必要になる。その動かし方を学んでもらいたい。区の役員さんの中には、役場職員がやろうというのならやるということは何人も聞いた。この協働は、職員の旗振りに掛かっていると思う。

伊佐委員長：職員の行動も難しく考えるのではなく、30分でもいいと思う。その代わりに、ちょこちょこ顔を出せばいい。そこに気軽に会話できる関係を築くことが大切だ。そうすれば、みんな本音を語る。そこを職員によっては嫌う者もいる。住民から色々言われるのでいやという職員もいる。そうした職員は現場から遠のく。行くのがいやになる。そこは迎える側がやさしく対応してもらえたらいい。

綾戸委員：今の意見は大事なことだと思う。町は町でしっかりと職員研修を行って、職員自身が何をすべきかを考える必要がある。また、地域にも問題がある。今の広川町は地域コミュニティでまちづくり係が中心になってがんばってくれていて、各行政区に担当職員を配置している。そうした職員をうまく活用していない。地区担当職員をうまく活用すれば、地域課題が町に伝わると思う。それを持ち帰ってお互いに知恵を出し合えば、課題解決が進んでいくと思う。地域は、町の職員をうまく活用しながら、地域おこしを進めることで、総合的なレベルアップが図られると思う。

伊佐委員長：職員の活用とは、こき使うという意味でない。活用としたら、何をさせられるのだろうかとなる。

綾戸委員：うちの例を言えば、まちづくり委員会に4名の地区担当職員が来てもらっている。4つのテーマで班を作っているが、各班に職員が一人ずつ入ってもらっている。その協議の中で出た意見の集約を行ってもらい、町に報告してもらっている。職員は、そのために書記の位置付けで、各班に置いている。その職員の中で一人を総括した議事録報告をお願いしている。そうした作業の中で地域の課題も把握できる。

伊佐委員長：それは人を活かすやり方ですね。活用といたら、こちらが使っているとなるので、人を活かす、持ち場を活かす適材適所的なものだ。

綾戸委員：そうですね。せっかく職員が地域に入って来ているので、何かに関わって役割を持ってもらいたい。そのためには、職員の意識も大事である。まちづくり委員会での職員の役割をおさえてもらう必要がある。

事務局（樋口）：何もなければ、こちらからのアプローチも大事ですね。

塩澄委員：一言、「元気ですか。」のあいさつでもいい。そう言ってもらうと、すごくうれしい。そんな掴みを持ってもらいたい。

事務局（樋口）：子ども達のワークショップでも、自分たちで「声掛けが大切だ。」と言っている。そこは、お互いが声を掛け合いながら、進めることが大切である。

伊佐委員長：そのとおりである。

綾戸委員：まちづくり委員会はどこの行政区も持っている。しかし、うまくいかない部分もある。

伊佐委員長：声を掛けたら、掛けられた方は「どうも、どうも・・・」とあいさつを返すことも大事である。最近では、どんなに声をかけても、返事しない者もいる。対話がなければ、助け合いは生まれない。人間関係はそんなものだと思う。他にありませんかね。

事務局（樋口）：申し訳ありません。「安全安心」の件については勘違いをしていて、「安全・安心」とポツを入れるのが正しいものでした。訂正させていただきます。

伊佐委員長：他に言いたいことはありませんか？

原委員：今、塩澄さんが言われたことに関連するのかもしれませんが、私も最初協働推進計画の策定に関わらせて頂いて、多分に勘違いの部分があった。役場から話を聞いたときに「役場に予算がない

から」という理由で、町が楽をしたいのかなという意識でいた。実際に会議を進める中で、内容を見て行く中で、必要なことだと認識した。多くの町民の感覚として、そうした部分があるのではないかと思う。そのまま、この推進計画を町民に示したら、恐らく、そんな考えをされる人が多分にいると思う。それを回避するには、これからどんどん情報発信を進めてもらい、「違います。みんなが住みやすいまちにするためには、皆さんの力が必要なんですよ。」という部分を、どんどん出していくべきであると思う。この計画に携わらせて頂いたことでわかった。この計画を提出した後で、広報でもなんでもいいが町民に伝えることが大切だ。定期的に言葉の説明であるとか、色んな取組みなど、塩澄さんが言われるように「町制60周年だから、誰かボランティアをお願いします。」などの募集をかけるでもいい。そんなものを発信して行って、直接町が主体となってやる行事が多数あると思うが、例えば、商工会が中心になって進めているリレーマラソンを町が応援しましょうとか、町民の皆さんも沿道で応援して盛り上げていきましょうとか、それぞれのレベルに合わせて、町が主体になるもの、ある団体が主体になるもの、地域が主体になるもの、私達何人かのPTAであったりとか、子ども達が主体であったり、それに対するホローアップをしていくような活動で、広げていくのがいいのではないかと思う。このように、色んな団体が協力して、進めて行くのが協働推進であるとは私は思っています。本日の当初の協議で出された協働のスローガンを公募してもらうなど、色んな手法で提出するこの計画を、時間を掛けて町民に説明していく必要がある。そうしないと意識は変わらない。町民の意識も一度には変わらないので、少しずつこの計画を浸透していくべきであると感じた。

伊佐委員長：ありがとうございます。

塩澄委員：私は、2月6日の県職のためのコラボセミナーを聞かせて頂いた。その話は、アドバイザーの今村さんが説明されていて、その後に実際協働をやっている福岡市の話など事例を聞かせてもらった。写真スライドなどが入って、すごくわかりやすかった。こうした文面だけの話では、わからないが実際の写真で見たがすごくわかりやすいと思った。

伊佐委員長：イメージがあるということですね。

塩澄委員：だから、お話しするときは、是非、事例を用いて、写真を使って説明されたがわかりやすいと思う。私も行ってよかったと思った。今村さん、ありがとうございました。

伊佐委員長：まちづくりカフェでお招きして、そうした話をさせてもらえばいい。

今村アドバイザー：今、話されたセミナーは福岡県主催の県と市町村の職員向けの研修だった。県職が4割、市町村職員が6割で100名程度が参加していた。主催していたのは、県のボランティアセンターで、NPOの人たちの活動者の話を聞くことをテーマに行った。こうした活動をお互いに手を組んで事業としてやっているといった団体が出てきている。そこがマインドというか心意気みたいなものだ。どちらかに対して何かを要求するといった関係がなくなっている。お互いに議論をぶつけ合って一番いい形にして行って、それでちゃんと課題を解決していくことに至っているという事例を3つ紹介した。それを聞けば、「これが協働なんだ。」と理解できる。出来るか出来ないかという話でなく、目指すものを見てもらった。この計画だけでは、説明できない部分も多数あると思うので、少しずつ、そのような状況を示すことで理解してもらおうという形に出来たらいいと思う。

伊佐委員長：ありがとうございました。

辻アドバイザー：今、皆さんの話を聞いていて、この計画の一番大事な部分は13ページのお互いに信頼関係を持って参画して活動するという事だと思う。「行政が楽しようとして」という感覚が、多くの町民の感覚であると思う。それを、そうではないと感じられたことは、非常に素晴らしいことである。そう思ったら、自分が恣意としてやっていくことを皆さんにはやって頂きたい。「一人で出来ないから、一緒にやる。」というのは、行政が一生懸命にやっていたが、なかなか伝わらないという部分があって、それを理解した人たちが一緒に取り組もうということが大切だ。この計画は、考えただけではなく、活動するまでが、「参画」と「活動」がシステムにならないといけないので、わかったということはやらないと意味がない。それを行政にやってもらうのも一つだが、一緒にやることで、ここでわかったことを市民に伝えることも必要だ。そのことで市民も理解できる。委員の皆さんは、これだけの議論をされて、ようやくわかったことであり、一般市民は簡単に理解できない。是非、ここに参加頂いた方が、一人ひとり、市民に広めて頂きたい。

伊佐委員長：ありがとうございます。丁度、今、町長がお見えになりました。

事務局（樋口）：では、ここで報告書の提出をお願いします。

《伊佐委員長より町長に報告書を提出》

事務局（丸山）：町長の方からお礼の言葉をお願いします。

渡邊町長：それでは、皆さん、こんにちは。大変お忙しい中だとは思いますが、本委員会に出席頂き、誠にありがとうございます。また、昨年の7月から5回にわたる熱心なご協議を頂きましたことについて、厚くお礼申し上げます。只今、受け取った報告書を基に、協働のまちづくりを推進していきたいと思っております。私は、広川町は、近隣の市町と比較したら、まだまだ、地域コミュニティが活発なところであると思っております。お蔭様で、地域においては、全行政区で自主防災組織が組織化され、地域自らが安全安心の取り組みを進めるなど、共助の意識も高まっています。こうした地域力が協働のまちづくりには欠かせないものであり、町の重要な政策として今後も推進していく必要があります。このためには、多くの町民の方々に色々な形で、参加してもらう必要があります。広川町では、ここ町民交流センター「いこっと」を昨年オープンさせることができ、活発な交流活動や子育て支援活動が行われております。今年は、「いこっと」と「はなやぎの里」を結ぶ歩道橋も完成させ、さらに施設利用の利便性も図られると考えています。こうした集いの場を活用しながら、今後も活発なまちづくりの活動がなされることを期待しています。これからも、町が取り組むべきまちづくりにつきまして、皆さんのお知恵を頂きご支援ご協力をお願いいたしまして、お礼のあいさつとさせていただきます。本当に長期間ありがとうございました。

事務局（丸山）：ありがとうございました。

事務局（樋口）：ここからは、フリートークとさせていただきます。

伊佐委員長：町長さん、今、非常にいい話をされていまして、本音の意見が交わされたと思っております。後ろのアドバイザーからも、素晴らしいアドバイスを頂いており、いい意見を頂いておまして、非常に良い形でまとめられたと思っております。後は、如何に進めて行くのかだと思っております。難しい行政用語をどうするのかという部分も知恵を出しましたので、町長も旗を振ってもらって、協働を進めて頂きたいと思っております。

渡邊町長：要は、すべての町民が行事等に様々な形で参加できるようにシステムを作り上げて、色んな活動を行ってもらえることが大事だと考えている。その活動の計画も地域住民自らが考え、これを行おうというように進むまちづくりにしていく必要があると思っている。こうした自律した活動は防災面が一番発揮できると思っているが、それとは別に、地場の商工業もコミュニティの復活が必要だと思う。今、新しいスーパーやコンビニが出来てきているが、元々ある地域の地場産業が先細りしている。こうした部分が、地域の衰退に繋がっている。地域の活力を今までどおり残すことは不可能ですが、残すためには、その地場産業の皆さんが地域の方とコミュニティを形成してもらい、復活してもらえることが大事であると考えている。このことで、地域の商店や産業が残っていくことに繋がる。そうした部分でも、協働のまちづくりにには欠かせないものだと考えている。ただし、それをどのように実現するかは、町民の皆さんの意見を聞きながらやっていかねばならないと思う。時代と共に商業の在り方も、工業の在り方も、地域での協働連携の在り方も変わって参りますので、それをうまく捉えて行く、そのためには常に町民との対話を続けることが大切だと考えています。

伊佐委員長：ありがとうございます。原さんが、先ほど言われていましたが、委員会の最初と違ってきた部分はありますか。今回、塩澄さんは、色々と意見して頂いて、お茶やお茶菓子まで準備されるなど本当に気を使って頂き、ありがたく思っています。

事務局（樋口）：話し合いの場にお茶やお茶菓子を出してもらるのは非常に和みますね。

塩澄委員：まちカフェみたいな取り組みは、色んな場所でやったらいいと思う。

渡邊町長：本音の意見をもらうには、本当はビールか酒を出すか、もっと気楽になれるかもしれない。

榊委員：この前から学校評議員とかにも参加させてもらって、一つ皆さんに聞きたいことがあるが、PTAの活動では参加者人数のことをよく言われる。保護者の参加が少ないと言われる。今、協働に置き換えたら、来れる人が来ている。強制して参加とは言っていない。質を求めて、人数を集めるのが目的なのか。全員が参加することで、いい形になるのだろうか。強制された形に過ぎないのではないか。PTA行事で人数が多ければいいというものではないと思った。皆さんは、どう思われるか？先ほどのマラソン大会の話もそうだが、1万円の参加費を取って行うようなマラソン大会でも北九州では多くの人数を集めている。小さな町は小さな町のやり方でいかないといけないのではないか。塩澄さんが、言われた活動をするためには、一つの活動でも、ものすごい計画が必要であって、おひさまクラブでも、20年の中で消えたり出たりを繰り返している。

塩澄委員：確かに、私も主任指導員で色んな学校や児童を見ていると、生活困窮者が多いのも事実である。だから、お父さんお母さんが懇談会に来られないというのもわかる。中には行きたくないという人もいる。そこを無理に数字でというのは難しいとは思いますが、懇談会・懇親会に行けば、何となく楽しいというように、しゃべることによってふっきれたという形に持っていくのも、PTAとしても大切ではないか。だから、懇談会にお茶を持って行って、集めるのも一つの手段ではないか。おひさまクラブが消えたり出たりということについても、私は消えてもいいと思っている。また、新しいことを見つけてきて、それをやればいい。色んなことをやっていい。その方が、人は同じことをやらせたらとやるより、変化があったが飛びつくと思う。今の若いお母さんは特に新しいことを好むので、以外と福岡で新しいことをやっていたら、真似てみたりしてみたら、意外と集まるのかもしれない。

伊佐委員長：人は自分の意見を汲み取ってもらえるのがうれしい。「やってみたら」と言ってやってみて、

「良く出来た。」と褒められたらうれしくなる。若い人は特に自信がないので、褒めてもらいたい傾向にある。久泉では、ホームページを作られたり、活発に活動されているが、何が原動力になっているのか。

綾戸委員：私のスタンスは、出来る出来ないは別として、区民からは意見を出してもらっている。出された意見は、出来るだけやる方向で取り上げる。ダメな場合、言った人も、議論する中でダメであるということがわかってくる。「無理である。」とは最初から言わないで、委員から出された意見は、一度、やる方向で、みんなで考えてみることにしている。意見が通らない場合、本人が納得することが大切である。

伊佐委員長：その意見が大切ということであれば、みんなも助けてくれる。

綾戸委員：一度、やってみることは大切だ。

塩澄委員：今年度、サンタクロースもされたと聞いた。

綾戸委員：サンタクロースでの子どものプレゼントは何年でもなる。

塩澄委員：すごいですね。

綾戸委員：そこはボランティアである。クリスマスイブに5名のボランティアがサンタにふんしてお父さんお母さんのプレゼントを託して、子どもにプレゼントを配っている。

伊佐委員長：今の話が参考にならないか。

綾戸委員：意見を聞く場を設けることが大切だ。

塩澄委員：人数は少なくともいい。来れる人が来られたらいい。よかったら、自然と増えて行く。

榊委員：県のPTAの発表でも、Pのお金を使うのに、毎回同じ人になる。何を開催しても、来る人の顔ぶれは変わらない。

塩澄委員：そこは、2：6：2の関係である。賛同者2と反対者2、どっちつかず6の関係にある。反対者をどう向けるかは難しいけれど。

伊佐委員長：結果的に、反対者をどんなに説得しようとしても、同じ方向は向かない。しかし、6割の中間者を振り向かせたら8割が同じ方向を向くことになり、多数となる。

綾戸委員：2割は、諦めないとしかたない。

本多委員：会合を開く時間帯を変えることもある。仕事を務めている人は平日の昼間は無理なら、夜ならどうか。夜でも来ない人は来ないと思うが、時間の融通を付けることも必要ではないか。

塩澄委員：面白かったという声が一人でも聞けたら、次は1人連れてきて2人になる。

榊委員：それが、誰かを連れてくるような時代ではない。

中村委員：お母さん達もきつい状況にある。結構、無理をしているお母さん達が多い様な気がする。私の母の世代と、私たちの世代では、アパート・マンションが増加し、核家族も増えているし、母親が努力しているが報われていない。

伊佐委員長：やっても、やっても報われない世界はきつい。

中村委員：言いたいことはあるが、参加しなかったり、言えなかったりしている。母親が可哀そうになる部分もある。

塩澄委員：ガス抜きが必要である。カフェを作ったらどうかと提案したこともある。しかし、反応がなかった。

榊委員：教育委員会はわかっている、現実には、大半が何を言っているのかわからないと、ズバツと言わ

れる。

塩澄委員：学校には言えないが聞いてもらいたいという親がいっぱいいる。

中村委員：しかし、言う気もない。

伊佐委員長：そこにNPO・ボランティアが中に入って、PTAの宣伝をやらしてもらえばいい。

塩澄委員：今、中学校でさせていただきますと言っているが、小学校が先と言われる。何処が先でもいいが、中学校は中学校でお母さんの悩みがある。

榊委員：だからこそ、地域の方々が優しく言ってくれればいいと思うのに、「中学校はあいさつもしない。」とか言われる。あいさつに来ていない人に対しては、不審者と思ってあいさつしない部分もある。

塩澄委員：子どもが、向こうからニコツとするのには、2年は掛かる。いきなりは無理。

中村委員：母親がきついと、その犠牲者は子ども達である。

本多委員：核家族が増えたからですね。

塩澄委員：だから、保健室登校が増えた。

伊佐委員長：なんか協働の課題が、どんどん出てきていますね。

渡邊町長：協働より家庭の課題が大きい。

伊佐委員長：家庭では解決できない部分がある。孤立した家庭が見えてきた。

渡邊町長：家でのあいさつが不足していれば、外でもあいさつ出来ない。私は団塊の世代で教育に失敗した世代である。お金の話ばかり言って、教育的しつけが出来なかった。そうした部分は個人的問題で、朝、「おはよう」とか、「いってらっしゃい」とこちらから言うことで、「いってきます」と言うようになる。こちらからあいさつをすれば、あいさつで返すようになる。途中で、よその人にあつたら、「こんにちは」と声をかけるようにと、言っていればちゃんと出来るようになってくる。こうした部分でお互いの信頼関係に変えることが地域コミュニティだと思う。私が一番思うことは、隣組でもいいし、近隣家庭だけでもいいが、たまにはお茶菓子を持って、「お茶でも飲みましょうか。」「酒でも飲もうか。」と気安く話せる部分を、どんどん作れたらいいなと考えている。そうした人と人との関係の輪が広がって、色んな行事に参加できていくと考えている。今、各行政区に地区担当として職員を貼り付けているが、こうした職員も区の役員と懇親の場を増やして、町に対する意見を聞いてもらうようにと言っている。信頼関係を築くために、人間関係づくりからやり直す必要があると思う。

4. その他

事務局（樋口）：本日、頂いた意見は最終的な調整を行って、修正後に委員さんへ送付する。

十時アドバイザー：最後に一言だけよろしいか。

伊佐委員長：はい。

十時アドバイザー：最後に塩澄さんが言われた課題は、何処の自治体も一緒に課題があり、職員の方にもどのように言うべきか困っている。やっている人間は、人が集まらなると楽しくない。苦勞の部分ばかりだと人は集まらない。そこは、気付いた人がやらないと、職員がきついと制度の中でやろうとしても難しい。PTAの話もあっていたが、PTAも官制団体であって自分たちが望んで創った団体ではない。世の中にある多くの団体が官制団体である。一方、NPOは新しい団体である。この関係は難しいところで、自分たちが楽しくなければ、人は集まらないという点は大切なことだ。

それを塩澄さんは指摘された。町民の話も言われたが、行政がどんなの声掛けしても動かない町民がいるという部分に対して、町民も自ら動く必要もある。そこは気付いた人から動き出すことが協働のきっかけで重要なことだと思う。この委員会でも4回の会議を重ねてようやく理解できたと思原さんが言われたが、それまでに何時間話しましたか。それを広報で説明しても、町民が動くわけではないので、きっと、町民が町民に伝えること、職員でも樋口さんや氷室さんなど、この事業に関わっている人が伝えるなど、両方で伝える必要がある。今回、築き上げたものを使って、塩澄さんのように気付いた人が職員や町民に働きかけることも大切であると思う。職員に単にお願いしても、絶対に動かない。これが60年間の間に築かれていった結果なので、急には変わらない。綾戸さんがやっているように仲間づくりを進めて、その仲間を広げていくしか手はないと思う。協働の取り組みは強制でやるべきものではない点はおさえておく必要がある。

伊佐委員長：私も、皆さんのお話をお聞きして、今交わされた“井戸端会議”のような状況が非常に重要なことであると考えている。きっと気付かされている。しかし、孤立した家庭では気付けない。そこに気付いた人がNPOなどを巻き込んで、一緒にやるのが協働だと思う。

十時アドバイザー：やられていることに対話の場を設けることが大切だ。PTAでは必ず人が集まるのだから、塩澄さん等をお願いして、そこを対話の場にしてもらったらい。一度、体験してその気になれば、そこで人が動き出す。言葉では人は動かない。共感・共鳴でしか人は動かない。

伊佐委員長：その時に、町としては、対話の場所を提供するなど、お互いが協力して課題に対応することである。

十時アドバイザー：やられている人から動くしかない。きっと、町内で一番協働を理解されているのは皆さんだと思う。事務局も担当は変わってしまう。そこがやっかいである。協働の取り組みで職員が異動で変わるの非常にネックとなる。そこでわかった町民が育てていく必要があると思う。

事務局（樋口）：同じ職員が延々とやるのではなく、変わることも大事であると思う。変わったとしても、その違った場所から情報発信すればいいし、新たな職員が来れば、また、そこに広がり生まれてくる。

伊佐委員長：だから、町内での会議が大事になってくる。お茶のみ話や井戸端会議でいい。そうしたら、色々な意見が出てくる。

塩澄委員：その会議の場に飴玉一つでもいいので、例えばPTAの懇談会の場にお茶と飴を出したらいいと思う。

榊委員：集まりが少なくても情報交換できていることが大事だと思う。

伊佐委員長：塩澄さんが言われた職員の関わり方については、多分、職員の中にはわかっている人もいる。そうした職員を後押しするのも大切ではないか。職員の不満は構造的な問題かもしれない。最近、仕事に追われて不満を抱えている人が多い。私は大学に居て、以前と比べて全然楽ではない。それを誰かに言っても理解してもらえない。「大学教授は楽だろう。」と言われることが多い。そこをわかってもらえない。

榊委員：学校でも、子ども達はわかっているのに、親はわかっている部分もある。お父さん達になれば、批判を言われることが多い。そこにストレスが溜まっていく。

伊佐委員長：一方では、お父さん達はサラリーマンが多くて、職場の事は家庭では言えない。みんなが不満を抱えて孤立している。

塩澄委員：そこを色々な場所でガス抜きする必要がある。

伊佐委員長：解決することがあれば、動いてやろうよと行動することが大切。それを区で動いているところがあるので、それがすごい。そうした部分は見習って、情報交換することで広がっていく。そうした「しゃべり場」が必要だと思う。最近、ボランティアも仕事としてやっている感もある。

塩澄委員：私は失敗しても「やってみて」というタイプなので、色々なイベントでも人が集まらなくても取りあえずやってみて、ダメであれば方法を考えるという程度が大事だと思う。

伊佐委員長：それはPDCAサイクルという。

塩澄委員：今、色々な取り組みをやっているので楽しい。楽しいことが好きです。

伊佐委員長：「楽しくやる。」が本日の結論ですかね。本日はありがとうございました。

5. 閉会のあいさつ

事務局（丸山）：皆様、長期間にわたる審議とまちづくりカフェへの参加など、本当にありがとうございました。これを持ちまして、広川町協働推進計画策定委員会を閉じさせていただきます。お疲れ様でした。